

平城宮第 172 次北発掘調査現地説明会資料

昭和61年10月25日

奈良国立文化財研究所・平城宮跡発掘調査部

小林 謙一

はじめに

調査は、今年春の第 172 次調査にひきつづき、内裏東外郭の東方を流れる東大溝の解明を目的とし、9月2日から開始した。東大溝に関しては、過去数次におよぶ調査を実施してきており、溝の構造・変遷等について、かなりの部分が明らかになっている。今回の調査範囲は、溝の南北約60mにわたる部分で、調査は現在も継続中である。

遺 構

◇ 東大溝 S D 2700 の変遷

東大溝は、奈良時代を通じ、規模を縮小しつつも、主要な排水路として用いられ、以下のような変遷をたどることが明らかになった。

I：地山を掘削してつくられた当初のもので、幅 5～6 m、深さ 1.8 m ほどの素掘り溝。

II：I の溝の東岸を西に寄せて狭め、石を積んで護岸した溝。幅 4 m 前後、深さ約 1.3 m。なお、今回の調査地を境に、北の方では、両岸に石を積んで護岸しているのに対し、南では、西側に石積み認められない。

III：堆積がある程度進んだ段階で、瓦を多量に含む土で、溝の西半を埋め立て、幅 3～4 m、深さ 1 m 程度の溝となる。東岸は石積みを利用。また、西岸では、杭を打ち込み、板をわたして護岸している部分もある。

IV：急速に堆積が進み、東岸沿いの幅 1 m 程度、深さ 40 cm 程度の溝となる。西岸を板材・石・瓦などで護岸している。

V：溝の埋没。

溝の各堆積層から出土した年紀木簡や土器などから、溝の年代の変遷をたどると、I は神亀年間を下限とし、II は天平年間、III は天平勝宝から天平宝字の頃を中心とする時期の溝であったと推定される。V では、延暦年間の木簡や 9 世紀前半の土器が出土していることから、奈良時代末には、小規模な溝 (IV) となっていたことが明らかになった。

◇ 暗渠・開渠

従来の調査でも明らかなように、東大溝には、東西から暗渠または開渠による排水が流れ込んでいる。第 172 次調査では、溝の東に接する内裏東方官衙から流れてくる 4 条の暗渠・開渠が検出されているが、今回の調査においても、発掘区中央付近で、東方から注ぐ 2 条の暗渠がある。

そのうち南の方に位置する暗渠は、東の埴積建物からの排水路で、東大溝の II・III・IV に対応してつけ替えられており、木樋を用いた暗渠から、最後は埴を用いた開渠となっている。また、西方からの流れ込みとしては、内裏東外郭の一部を画する築地の北側溝、および、内裏内郭東方に位置する井戸の排水路からの流れが確認できる。

遺 物

東大溝からは、大量の金属製品、木製品、瓦埴類、土器、木簡等が出土した。

◇ 金属製品

皇朝銭 (和同・萬年・神功・隆平) ・帯金具・銅人形などがある。銅人形は 2 点が出土した。従来、平城宮跡で出土している銅人形は、細身で、大きさや形が木製人形とやや異なるものだが、2 点とも大きさや形が木製人形と似たタイプである。第③層と第①層から出土した。これによって平城宮の銅人形に、独特の形をもつタイプと木製品類似タイプの二種があること、木製品類似タイプが 8 世紀初頭に遡ることが明らかとなった。

◇ 木製品

木製品には、人形・刀形・鳥形・斎串・陽物などの祭祀具、曲物・皿などの食膳具、櫛などの装身具、下駄などの服飾具、鳥形の彫刻、木球 (球の芯)、棒状品などがある。

鳥形の彫刻は、鷹などの猛禽類を象ったもの。現状では彩色の痕跡はない。調度品の一部であろうか。

◇ 漆 器

金銀で文様を描いた蒔絵の製品、黒漆塗の壺・杯などがある。蒔絵の製品は第③層上部から出土した。器物の一部の八角の棒状品である。両端を折損し、直径 1.5 cm、現存長 20 cm。黒漆地に、金銀粉を蒔き、植物文様の一種、花卉文を表わす。金粉は純金に近く、角を整えた粉を蒔く。一部に銀粉をまじえる。金粉上には、塗込んだ黒漆が部分的に残る。銀粉は若干の金粉をまじえ、腐食のため、漆面より盛り上っている。

花卉文は一茎の両側に葉を 2 ないし 3 葉 (先端は花?) を出すもの。微妙な違いだが、対生と互生を描きわけているようにも見える。

金蒔絵は一茎の花卉文を 1 単位とするのに対し、銀蒔絵は三茎を 1 単位とし、さらに金蒔絵と銀蒔絵を上下に交互に配するなど、意匠的にも優れている。本例の年代は、出土層位から奈良時代末に位置づけることができる。

蒔絵は、生漆で文様を描き、大小さまざまの粗いやすり粉を蒔き、漆を数回かけた後、炭で文様を研ぎ出す技法 (研出蒔絵) をいう。日本では奈良時代が初現とされるが、この時代の遺品は正倉院宝物の金銀装唐大刀と法隆寺献納宝物の矢柄の 2 例があるだけである。金銀装唐大刀は、正倉院宝物の大刀の中でも特に見事なものだが、この大刀の鞘上に、走獸・含綬鳥・雲文・

唐草文・花枝などを蒔絵技法で表わしている。この大刀は、天平勝宝8歳（756）6月、光明子が聖武天皇遺愛の品々を東大寺に納めた『献物帳』の註記には「鞘上末金樓作」とあり、特にこの例に関しては、蒔絵とは呼ばずに「末金樓」の名で呼んでいる。法隆寺例は、黒漆地に金のやすり粉を蒔いただけのもの（蒔放し）であるから、正倉院例が当代の蒔絵の代表例と言ってよい。従って、本例は奈良時代の数少ない蒔絵の遺品に、新たな例を加えたことになる。

正倉院宝物の中に、本例の花卉文と同じ文様は見当らないようだが、似た雰囲気のもの、吹絵紙や桧金銀絵経筒の文様に一部ある。このように、技法・文様の上で、本例と正倉院例とは密接な関連がある。今後、両例を詳細に比較研究することによって、奈良時代の蒔絵技法の実態を解明する手懸りを得ることができよう。

◇ 瓦埴類

東大溝からは大量の丸・平瓦とともに、総数2300点にのぼる軒瓦・鬼瓦・埴などが出土した。この中では緑釉埴の破片の発見が注目される。東大溝出土の軒瓦は、内裏東方官衙地域所用瓦（6135A—6688A）を主体とする。特に溝Ⅰと瓦溜（溝Ⅲの西側護岸）で顕著である。溝Ⅱでは内裏および内裏東外郭地域所用瓦（6311A・B—6664D・F）も目立つ。溝Ⅲでは6282B—6721Cが若干見られる。溝Ⅳには東岸南北細溝の西護岸材として、軒瓦（6664D・6689A・6691A）が使用されている。溝Ⅴからは軒平瓦（6702A・6801A）が出土している。出土層位と型式関係は、従来の平城宮軒瓦編年に概ね合致するものであり、周辺の役所における改築、建替といった建物の変遷を反映している。平瓦では、奈良時代に一般的な縄目叩きの平瓦の他に、格子目叩きの平瓦が多量に出土しており注目される。また、「足得」と刻印した平瓦も出土した。この種の刻印瓦は東大寺法華堂、恭仁宮から出土しており、これらは各工人の造瓦の割当て分を明確にするため、何千枚かに1枚の割で押されたものらしい。また「修」と刻印したものや「東」とへら描きした丸・平瓦も出土している。「修」は修理職を示し、修理職が造瓦に関与していたことがわかる。

溝東岸に埴敷き舗道や埴積基壇の建物があるためか、他の場所に較べ埴の出土が際立っている。埴は多くは無釉の長方形埴であるが、東院地域で比較的多く出土する緑釉を施した埴が1点出土している。内裏の建物で使用されていたのであろうか。

◇ 土器

東大溝の各層から合わせて600箱程の土器類が出土した。その多くは土師器と須恵器で、内裏や周辺の役所で使用されたものである。他に量的には少ないが、施釉陶器類（奈良三彩・緑釉・灰釉陶器）、統一新羅時代の須恵器（新羅焼）の破片も出土している。また日常什器以外にも祭祀に使用された土器・土製品や陶硯がある。

〈日常什器〉 土師器・須恵器の多くは食器類であり、煮沸具は極めて少ない。器形の上では

宮の他の場所から出土するものと変りないが、須恵器には、正倉院に伝わる^{かなまり}甕を忠実に模した珍しい碗が数点出土している。また両面を黒色処理した黒色土器が第⑤層から出土しており、奈良時代にこの種の黒色土器は今まで未発見であり、注目されよう。第②層からは、岐阜市老洞古窯^{おいぼら}で生産された「美濃国」の刻印を押した須恵器片。第③層からは、「宮」の刻印を押した須恵器片が出土している。

〈施釉陶器〉 奈良三彩には、鉄鉢・小壺・長頸瓶・陶硯と考えられるものなどがあり、宮の他の場所に較べ、出土量が多い。内裏の調度品であったと考えられる。

緑釉・灰釉陶器は、9世紀前半のもので、緑釉は京都洛北で、灰釉は尾張猿投窯で生産されたものである。

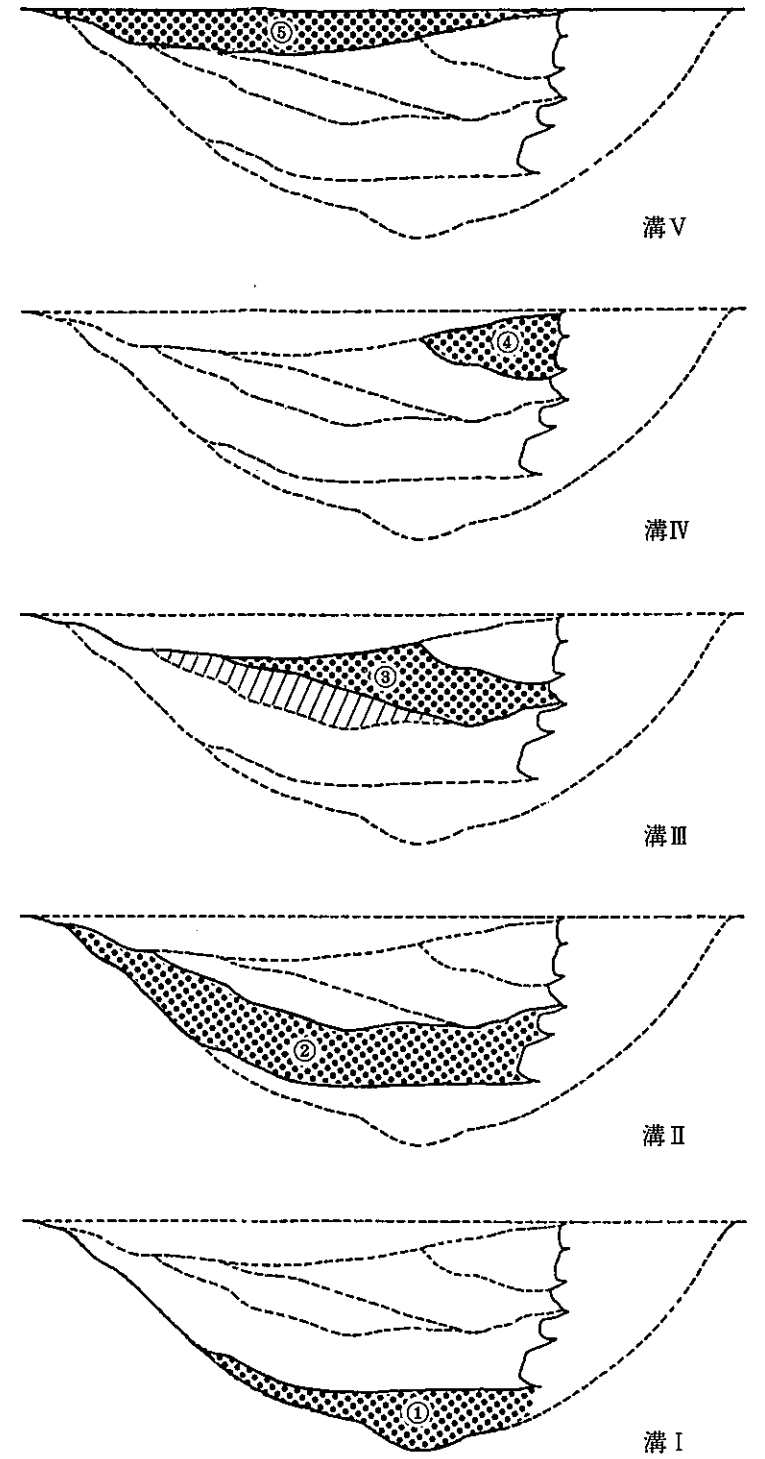
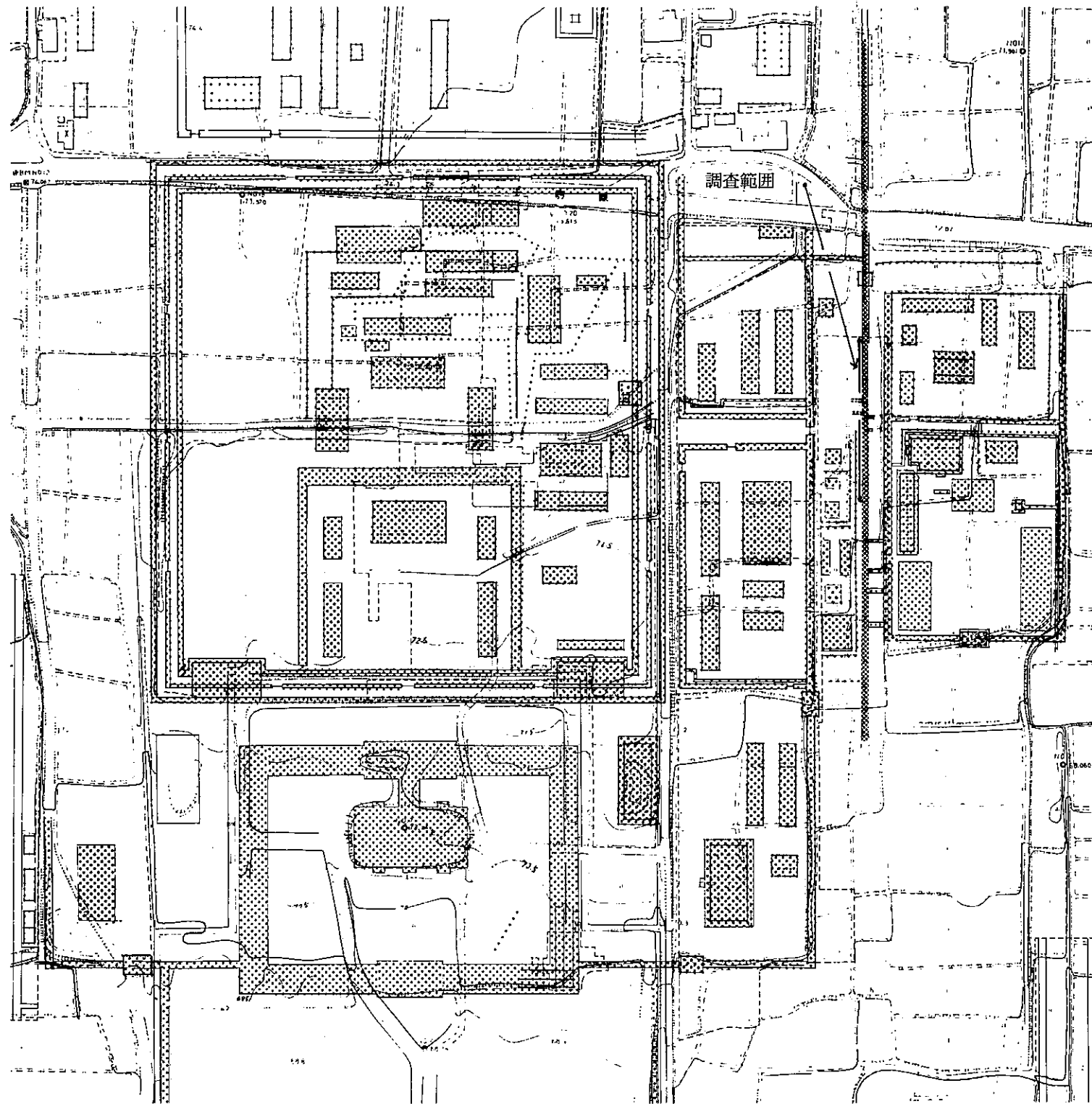
〈新羅焼〉 韓国慶州市雁鴨池から出土した瓶形の器形と共通する。これまで宮内から新羅焼は、これを含め2点しか出土例がなく、当時の日韓交流を示す遺物として注目される。

〈祭祀土器・土製品〉 須恵器のミニチュア製品は、尾張猿投窯で生産されたもので、杯・壺・壺蓋・俵瓶・双耳瓶などがある。天平宝字年間^{（757—763）}の年紀木簡と伴出しており、猿投窯の須恵器編年を考える上でも重要な資料である。

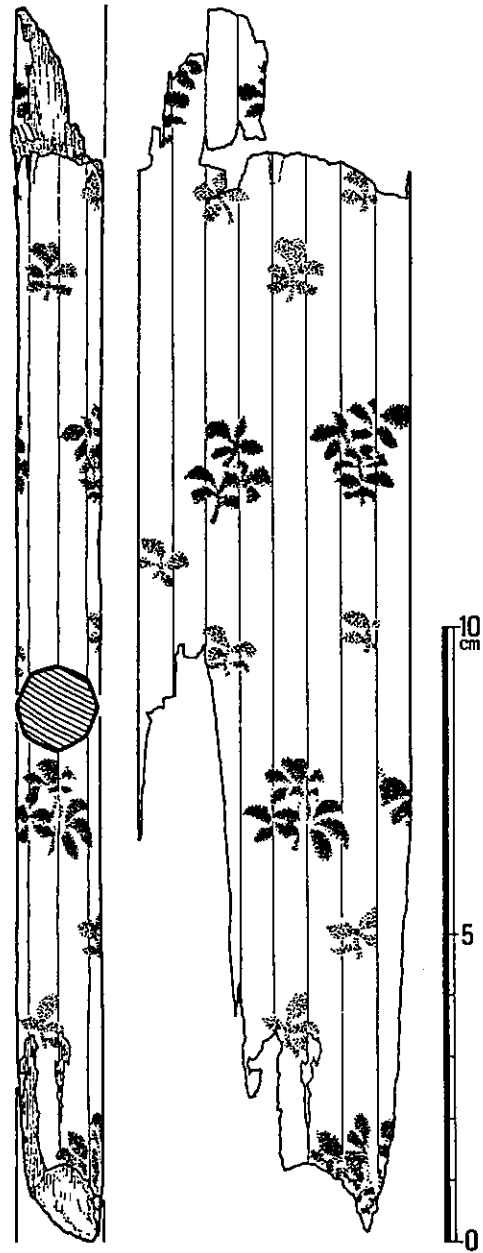
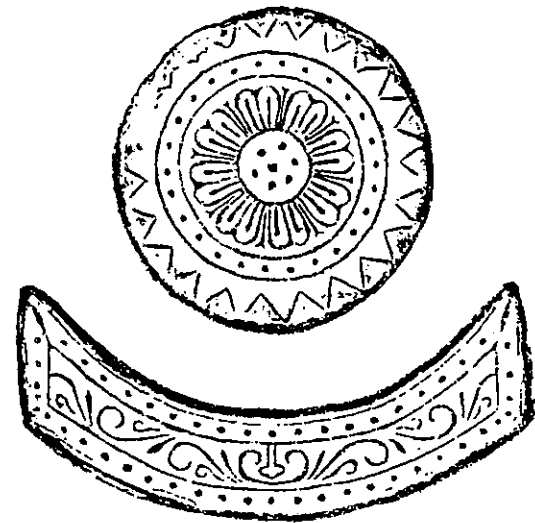
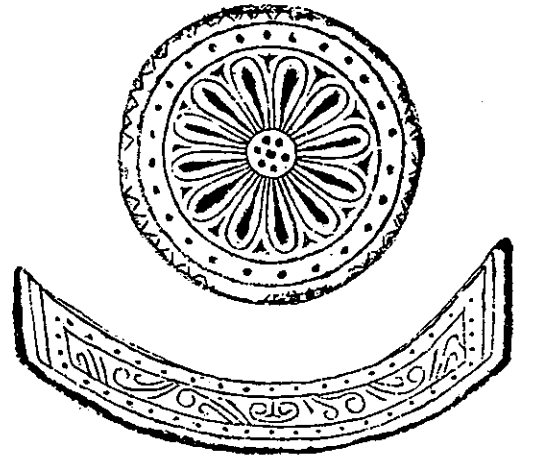
この他、祭祀に使用されたものとしては、土馬・ミニチュアカマドセット・人面墨書土器がある。他の木製祭祀具と共に、内裏周辺で行われた祭祀の実態を知る上で貴重な資料となっている。

◇ 木簡

出土点数は現在整理中のため確定できないが、800点をこす見込みである。今回の木簡の特徴の1は、年紀をもつ木簡が30以上にのぼることであり、その大半は天平勝宝～天平宝字年間に集中する。これを詳細にみると、年紀木簡がほぼ層位をなして堆積していることがわかり、各々の層の年代を前述のように推定することができた。特徴の2は、貢進物に付けられた荷札の木簡が比較的多いことである。溝に近い内裏およびその周辺で消費された段階で棄てられたものであろう。荷札の中では専当官（税の徴収責任者）の名前を記す木簡が2点出土しており注目される。専当官名記載の有無は、荷札が国衙で作成されたか郡で作成されたかを考える場合の重要なポイントになるもので、これまでの出土例と合せて計4例となった。特徴の3は、造営に関わる木簡がまとまっていることである。それらの多くは天平宝字頃の木簡が集中する層から出土しており、この頃の宮の造営をうかがわせる。特に12「造東院所」の記載や、11「造宮省…（表）」「天平宝字三年卿従三位藤（裏）」とある木簡などは、造営の場所と、造宮卿の名前が知られ興味深い。また伴出した墨書土器の中に「造宮」などがあり、関連するものといえよう。ほかに17「内隔南方西門籍」や15「甘檉殿」など、注目すべき語句もみえているが、詳しい検討は今後の課題である。



東大溝 S D 2700 の変遷 (様式図)



蒔絵の製品
 (左：実測図 右：展開図)

軒瓦
 (上)6135 A - 6688 A
 (中)6311 A - 6664 F
 (下)6282 B - 6721 C

第一七二次北 出土木簡 (抄)

※ 1 安房国長孫郡置津郷戸主丈部黒秦戸口丈部第輸凡鯁陸斤 専当国司目正八位下箭口朝臣大足郡司少領外正八位上丈部□□ 天平勝宝□□

2 駿河国駿河郡子松郷津守部宮麻呂段□□荒堅魚拾壹斤拾両 天平宝字二年□□当国司目正六位上息長丹真人大足郡司少領正六位下□□舍人足人

※ 3 因幡国巨濃郡潮井郷河会里物部黒麻呂中男作物海藻六斤 天平七年七月

4 阿波国那賀郡武芸駅子戸主生部□□戸同部毛人調堅魚六斤 天平七年十月

※ 5 尾張国智多郡富具郷和尔部信□□人之
調塩三斗天平勝宝七歳九月十七日
※ 8 若狭国三方郡葦田駅子
三人国□□御調塩三斗
「廿一廿一米當」

※ 6 出雲国意宇郡飯梨郷中男作物海藻叁斤□
籠重漆両 天平勝宝□歳十月

※ 9 遠敷郡野郷矢田部諸人
野郷矢田部諸人
御調塩三斗

※ 7 御野郡出石郷白米五斗
□□宝八歳米五保倭文部東人
天平勝宝

※ 10 遠敷郡嶋郷秦人子人
嶋郷 御調塩三斗

11 造宮省 合□□□ □ □ □

天平宝字三年 卿從三位藤□□

※ 17 内隔南方西門籍

※ 12 造東院所 請藥參□

18 神祇□官

・「嶋万侶行」

※ 19 (檢扇)

※ 13 造五丈殿所請合釘四隻 各長七寸
右為□字箱□下桁□
料請如件

① □

・光光光

※ 14 上総国平群郡狹隈郷□丁若□□部麻呂養錢六百文

② 京一条二

・秦秦秦

※ 15 牒上 男繩御所

□物部広公相替請□丈部国勝

③ □前前前

・右人上官好由而令下甘櫨殿 九月二日□国□□

④ □□□私私

※ 16 大伴小宮之人之大

・(守部乙虫
秦五百□八 八十

※印は展示した木簡の釈文